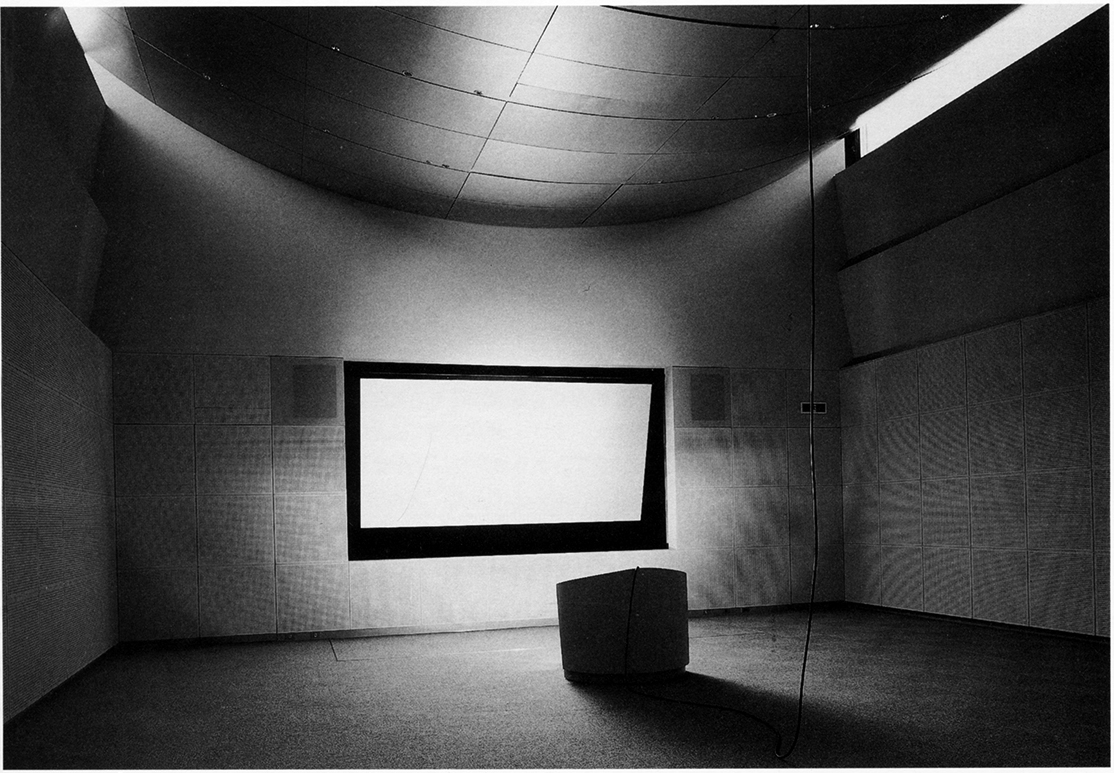
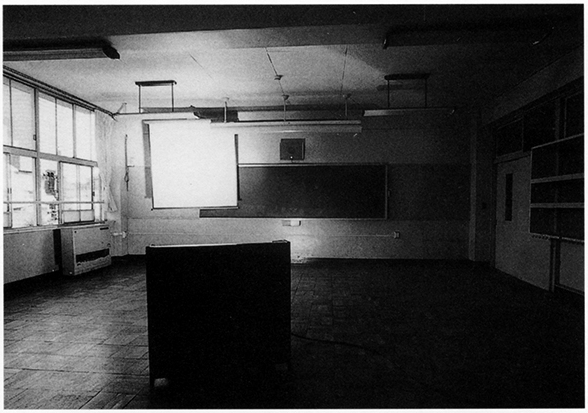
GALLERY SURGE OPENING PROJECT 1999

ARICHI Soichi + SASAOKA Takashi

REFLEX 1999
18-30,Jan.1999



REFLEX 1997「ものとあらわれ」和歌山県立近代美術館　PH:ASAE TAMIJI



REFLEX 1996
日本・オランダ現代美術交流展 1996
「根の回復として用意された12の環境」　旧赤坂小学校／東京

Blindness and Insight

田尾弘一

なにものかを見るべき場所に、見るべきなにものかが置かれている。あたりまえのこととして受け取られうる、それでいてどこか奇妙なこうした風景の中に、Ａ＋Ｓはそこにあるべきなにものかに似通った別のなにものかを、静かに置く。

それは確かにその場所で、あるべきなにものかとして、いかにもふさわしげに振る舞う。視線を向け、彼らが記した言葉などうなずきながら読み、近づき、遠ざかる者たちは、どこか満足げに囁き合っている。それでもやはり、そこにあるなにものかは思っているような代物ではない、そんな微かな疑念を抱きうるならば、Ａ＋Ｓはそこから侵入するだろう。

人が目にする、形あるものは、すべて光の下にある。しかし人はそのことを意識しはしない。光を見ているのではない。対象の明暗にかかわらず、明るみの中のクリアな視界と、暗がりの中境界の不分明な視界とにかかわらず、彼は形あるなにかそのものをこそ見ている。そのはずだ。しかしこの逃れがたい枠組みの中で彼は、見ていることを、それが繰り返される限りにおいて常に失い続ける。

自己と他者が適当な距離を取って存在し、連続する入力の中で、人が見ていることを見失う、この驚くべき場所は、実は日常と呼ばれているようだ。日常において、人は見たものを思い出すことができない。あなたはこの文章を目にする１０分前に見たものを正確に言い当てることはできないはずだ。

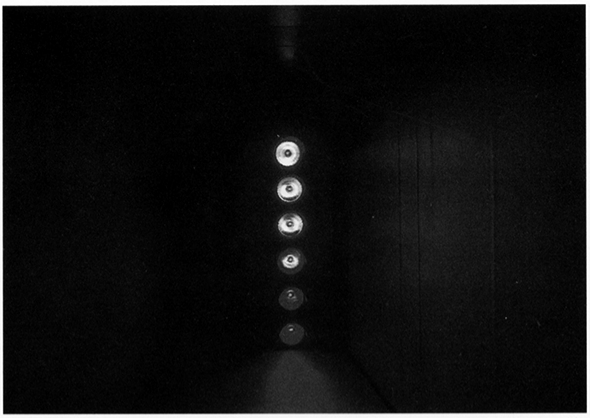
そしてＡ＋Ｓの光は、非一日常的な時空、＜見ること＞がまさに＜見ること＞であるような時空、ある固有の時空をひらくためのデバイスとして結果的に機能する。

「光の持つ力の追求」、Ａ＋Ｓは自らの作品展開の目的をごく簡潔に語る。そこにあるのはなにかを明るみに出し、ものに色と形を与えるためのメディアとしての光ではない。情報伝達のための媒体である光自体がいやおうなしに帯びる力に向かって、作品は組織される。光はまず、それ自体として存在し、いかなる意味も、物語も、現象学的還元の果てにかけらも残らないような場所がかたちづくられる時、見る者はそこから、攻撃的な沈黙を引き出すことになる。

1988年からはじまる、光と水が織りなす影を基調とする「WATER」シリーズ、1992年からはじまる、蛍光灯を操作して新たな光を取り出す「LUMINOUS」シリーズ、そして今回展示される、1993年からはじまる、強い光源と反射材を用いた「REFLEX」シリーズを通じて、Ａ＋Ｓは、シンプルな仕掛けで展示空間に驚くほどの装飾性を付与してきた。しかし、それは彼らの持つ一つの側面にすぎない。装飾性が結果として＜見ること＞を日常に回収するために機能するがゆえに、「光の持つ力の追求」において、Ａ＋Ｓは極めてそれを注意深く扱っているのだ。

1996年の「REFLEX 1996」（日本・オランダ現代美術交流展「根の回復として用意された１２の環境」）は、

REFLEX 1997-Signal
「光をつかむ－素材としての＜光＞の現れ」展
O美術館/東京



それゆえに提示されねばならない作品だったろう。会場となった廃校の教室、教壇の下のスタジアムライトが強烈な光でスクリーンを照らすこの作品は、それまで展開されてきたシリーズの中で最もポエジーから遠く、ほとんど最小限の装飾性によって構成されている。しかしそこで繰り広げられていたのは、ミニマル・アートあるいはレディメイドの反復といった事態ではない。

日常的なものから引き出されるリアリティに依拠し、この世界に偏在する美を証そうとしたこれらの先行者に対して、A＋Sは、日常の中に隠蔽される巨大な力自体を取り出し、彼我の距離をずらした上でそこにとりあえず置いてみせたにすぎない。それは美学的な要請において聖別されるのではない。あらゆる美術の前提としての＜見ること＞が、あまりにも脆弱なものであることを証そうとするがゆえに、力は追求される。

1997年、6基の信号機を積み上げ、白塗りの細長い空間に設置した「REFLEX 1997－Signal」（「光をつかむ－素材としての＜光＞の現れ」展、東京・O美術館）のカタログに、A＋Sはこんな言葉を寄せている。

「もう一度光を見つめてみよう。私達は見慣れた信号灯の光の中にもあらゆるメタファーが発見できるはずだ。光はあらゆるものに通底している」（有地左右－十笹岡敬「アンケート《現代における＜光＞，あるいは＜光＞の表現について》」）

しかし、信号灯の持つ予想外の強い光は、まず見る者からあらゆるメタファーを剥奪しはしまいか。外界から切り離され、距離を縮約され、本来の意味を失った青－黄－赤の反復の中で、人はメタファーの根拠を維持しえない。そして恣意的に切り出された時空において、かつて自らが属していた自己と他者の距離感を回復すべく、日常に立ち返ろうとする瞬間、まさにその瞬間においてこそ、あらゆるメタファーは起動する。

ここにあるのは、あるいは＜見ること＞の本来性なのかもしれない。＜見ること＞はいつも、未開の領野に向かってひらかれているにもかかわらず、気がつけば慣れ親しんだ風景としての日常に回収され続けている。それでもなお＜見ること＞は、いつもすでに、主体の意識とほとんど関わることなく、繰り返し生起し続ける。人はこうした事態に対してもっと驚くべきではないだろうか？　いずれにせよA＋Sは、この偏在する驚くべき死角がひらかれる瞬間に立ち会うために作品を構成するだろう。

その拡がりも奥行きもさだかならざる日常が、絶えまなく続く＜見ること＞の結果として維持されている時、この非－日常的な＜見ること＞にさらされ続ける日常の、その一つ一つの＜見ること＞こそ、体験と名付けられるべきものに他ならない。A＋Sは、見る者に体験をこそ与える。だから人はそこで一人として同じものを見ることはない。体験とは、悲しいくらい孤独に味わわれるものなのだから。例えそれがいまここで開示されないとしても、彼は不意に思い出すだろう。日常の中で、突然、A＋Sが切り出したあの光が回帰する。あらゆる脈絡を越えて、にわかに彼は力としての光を思い出す。そんな想起にも、またA＋Sの意匠が刻まれている。

G A L L E R Y S U R G E
〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル1F Tel.03-3861-2581 Fax.03-3861-2582
Watanabe Bld.1F,2-7-13,Iwamoto-cho,Chiyoda-ku,Tokyo 101
http://www.catnet.ne.jp/surge/ e-mail=surge@catnet.ne.jp

協力: ササベ印刷株式会社 〒710-0806 倉敷市西阿知町西原1327 Tel.086-466-1111 Fax.086-466-0456

「REFLEX 1999」によせて

有地左右一＋笹岡敬

「REFLEX 1999」は1993年からのミラーボールを使用した作品から始まり、1996年の日本・オランダ現代美術交流展「根の回復として用意された１２の環境」に出品した高照度のライトを使用した作品、1997年Ｏ美術館「光をつかむ一素材としての＜光＞の現れ」展での信号機を使用した作品と展開してきたシリーズの新作である。これまでの「REFLEX」シリーズは照らすものと照らされるものの関係を微妙に異化させることで、われわれが日常認識している光の存在をテクノロジーの持つ属性から解き放つことを目的としてきた。

「REFLEX 1999」もその延長上にあるのだが、今回、観客が見るのは光というより光源の映像である。今日ほど映像が巷に溢れ、あらゆる情報が視覚化されている時代はなかったろう。われわれはテクノロジーの発達とともに、世界のありようの認識を拡大し、加速化しているように見える。しかし実際には、映像やイメージはテクノロジー（コンピュータやクローン技術や）を通して我々の現実感を脅かしている。否、仮想現実という新たな現実を作りだし、すべての現実を書き換え可能にしようとしているようだ。欲望を限りなく拡大していく一方で、それらを投影するすべての情報や映像はリアルタイムで存在しえない。夜空を見上げて見える星も、そのときに存在しているとは限らない。これらのことは私たちの見る世界は事後的に存在を確認することしかできないという絶対的な不安をあたえる。私たちは鏡を通して反転された自分しか見ることができないのだ。現実は非現実から立ち現れてくる幻想なのかもしれない。

「REFLEX 1999」はそれらの在りようのモデルである。以下にジャン・ボードリアールから引用する。

われわれが世界を非現実的にしようとしているのは、世界のこのおそるべき客体性から逃れるためなのだろうか。われわれがヴァーチャルなものにしようとしている現実世界に最終通告を突きつけることから逃れるためなのだろうか。

なぜなら、現実という概念は生活と幸福に力をあたえるとしても、まちがいなく悪と不幸にそれ以上の力をあたえるからだ。現実世界では死もまた現実となり、現実にふさわしい畏怖をまきちらすが、ヴァーチャルな世界では誕生と死の経験無しですむので、それと同時に責任の観念がひどくおぼろげで耐えがたいものとなり、もはや責任を引き受けることもできない状況が生じる。おそらく、真と偽、善と悪等々を区別するというあの気の滅入る務めをいつまでも果たす義務感から解放されるために、われわれは責任を引き受けないという代価を支払う気になっているのだ。

ＣＡＳ誕生

1999年1月より、大阪の天満橋の小さな場所でＣＡＳがスタートします。ＣＡＳは数名のボランティアによって運営され、運営委員会が選出するキュレーターによる作家の展覧会が、年間を通じて約１ヶ月から２ヶ月の会期で行われます。なぜ、オープンでなくスタートなのかというと、ＣＡＳの理念は「Contemporary Art and Spirits」にあり、スペースを創るという発想から生まれたものではないからです。ＣＡＳの基本は非営利であることです。美術が営利目的になるといろいろな利害関係が発生します。ＣＡＳは美術をそのしがらみから解放したところから始めたいと考えています。そのことにより、作家・キュレーター・鑑賞者や愛好家は自由な環境で美術に参画し、かかわることができると考えています。

ＣＡＳの考える美術とは「造る・展示する・観る」という硬直した関係でなく、「美術のありかた」自体を指します。美術とは「美術を実現していく意思」です。その意志はすべての人に開かれています。しかし今、その意志は営利のために分断され、お互いの領域を確保するために、クオリティの追求とは関係なく「制度（画廊や美術館）」の存在が各役割を保護しようとしています。ＣＡＳは、その「意志」を「美術」として捉え、あらゆる立場の人が展覧会の成立に直にかかわることにより、私たちの考える美術が可能になると思っています。是非、ご参加下さい。

CAS運営委員会
〒540-0038 大阪市中央区内淡路町2-1-7--602 Tel06-941-3237 Fax06-945-4709
右記のアドレスに随時ＣＡＳの情報がアップされています。e-mail master@cup.com URL http://paper.cup.com/